

気にして欲しい

久聖

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2022年、道明寺歌鈴の誕生日SSです。

ミス・フォーチュン・テリングのリモート新年会に藍子を招いた歌鈴。しかし年長者である茄子が暴走をはじめて……。

気にして欲しい

目

次

1

気にして欲しい

「あけましておめでとうござりますっ！」

六人の明るい声がワンルームに響き、乾杯の音頭で二つのカップが控えめに触れ合う。

「待つて待つて。歌鈴ちゃんたちなに飲んでるの」

下ろした髪を左右に揺すり、のぞけるはずもないものを藤居朋がのぞこうとする。道明寺歌鈴と高森藍子はティーカップをスマートフォンのほうへ傾けた。ここは女子寮の歌鈴の部屋。電気ケトルにお湯をたっぷり沸かし、親が持たせた“それなりな代物”的一セツトをテーブルに広げている。みたらし団子やかぼちゃのプリンなどのちよつとしたスイーツ類がお茶請けだ。

「一杯めはジャスミン茶です。藍子ちゃんが持つてきました」「ハーブティーのギフト、お歳暮ですけどせつかくだからと思つて」「あーそつか。お歳暮かあ。あたしも肉貰つた氣がするな……出してこよ」

歌鈴のスマートフォンの画面から朋が消える。画面のなかから三組、外から二組、空席に苦笑の視線が注ぐ。

「こしも朋さんは自由でしてー」

左右に煎餅のタワーをそびえさせる依田芳乃が、そういつて湯呑を傾けた。急須から新たに緑茶を継ぎ足すのを見守り、白菊ほたるがおずおずと口を開いた。

「芳乃さんもけつこう自由ですよ……？」

「ほたるちゃんと私だけ真剣に新年会の準備しそぎちやいましたね」

鷹富士茄子がわざとらしく虚空に溜息をついてみせる。歌鈴たちは、彼女の前に広がるこたつテーブルに焼いた伊勢海老やお作り、天ぷらが堂々と居並ぶのが見える。そしてほたるがときどき画面の頭越しに手を伸ばすのは、寄せ鍋をかき混ぜているらしかった。「お団子は和だし、プリンもかぼちゃなら和食みたいなものですつて！」ハーブティーも華やかでいいじゃないですか

ほたると歌鈴の反論になにか思うところがあつたらしい。芳乃の

煎餅を食べる音がぱりぱりとスピーカーから部屋を侵略する。

「いえいえ、歌鈴ちゃんは女の子を部屋に連れこんじゃつてますから。一番やらかします」

「つれつ!?

「いきなりいなくなつた朋さんよりヤバいんですか……?」

「えつなに? 貰つた肉食べきつてたの思い出してガツカリしてもどつてきたらほたるちゃんと罵られてるんだけどあたし」

「歌鈴さんが隅に置けないという話なのでしてー」

無言の抗議を一枚終えた芳乃は、熱い緑茶の息とともに小針を宙に吐き出した。歌鈴がすがつて藍子に顔を向ければ、肩をすぼめて怯えた表情を作っている。それが悪ふざけなのはわかつているものの、やめさせる方法まではわからない歌鈴である。触れるでもなく手を伸ばせば待つてましたとばかり藍子は悲鳴をあげて転げ、つられて歌鈴も倒れこむ。

「あらあらお盛ん」

「若いかたがたはお元気ですことー」

親指の爪ほどに割つた煎餅を口のなかでふやかしながら芳乃が老人ぶる。朋は正月の残りの伊達巻と一緒に、状況をなんとなく呑みこんだ。歌鈴が藍子を呼んだのを画面越しに知つた数分前には自分もだれか誘えばよかつたとほんやり思つたものだが、むしろこれで正解だつたのかもしれない。塞翁が馬とはこういうものかと、炭酸水をペットボトルからじかに飲む。

「そーいうことだつたら芳乃ちゃんだつてだれか誘つてなかつた?」
「……岡山は大雪で立ち往生だそうですー」

ぱりんと煎餅を噛み碎く。焼き餅の八つ当たりの犠牲者へ、朋は『かわいそう』と『面白い』の視線を送つた。床で揉みあつていた歌鈴と藍子はそろりそろりと身を起こした。中身の残つたティーセットの無事を確かめて胸をなでおろしたのも束の間、歌鈴の部屋着は大きくはだけていた。下着の色を芳乃が淡々といふ。藍子はほとんど覆いかぶさるようにして歌鈴とスマートフォンの間に割りこむと、脱げかけた袖を直し、襟を整える。その手つきがいさか乱暴で歌鈴は

苦笑いをすると、二人を純粋に気づかってほたるが声をかける。……それを追つて茄子が親爺じみた言葉をかぶせる。

「一杯めからおつ……。……まだやめておきますね」

「うん、ずっとやめとけ？」

口許だけ半笑いにして朋がこの場で唯一の大人をたしなめる。その大人、ずっと手酌でぬる燗をすすつていたことに、歌鈴と藍子と朋はようやく気がついた。

「ていうか最年少の隣でなにガチ飲みしてんの最年長！」

「あら、知らないんですか」

「な、なにを」

悪びれもせぬ調子に追及の手をつきかねると、茄子は白いお猪口を空にして言葉をつづけた。

「ほたるちゃんを見ながら飲むお酒は美味しいんですね」

「ほたるちゃん、そいつどついていいわよ」

煎餅の音をBGMに、リモートどつき漫才がはじまつた。奈良県、関西の出身とはいえ歌鈴は、こうした荒波に飛びこんでいつて全員どつき倒す舌鋒を備えてはいない。スピーカーの振動でクレードルにカタカタ音を立てるスマートフォンの音量をそつと下げ、藍子の顔をちらりと見上げた。

「ゞ、ゞめんなさい、藍子ちゃん。こんなことになるとは思わなくて」「私もそれはちょっと驚いてます。けど、楽しいですよ。こういう賑やかさ、……前もあつた気がするけど……不思議と楽しいです」

二杯めのホットジャスミン茶でもういちど乾杯をする。こんどは音がしない程度にそつと、思わずたがいに笑いを洩らすほど長く。歌鈴と藍子がスイーツを交換しながらティー・ポットを空にし、ラベンダーティーのパックをいれ、電気ケトルにふたたび満タンのお湯が湧く。芳乃の煎餅タワーは一本に減り、朋はしゃべる以外に口の使い道をなくしていた。茄子とほたるの料理はさほど減つていない。それはほたるの遠慮がちに食べるのを茄子が見てばかりだつたせいである。

「じゃあそろそろ隠し芸大会をはじめますよー！」

「えつ」

心底困った声を出したのは歌鈴である。そんなものをやるなんて聞いていたなら藍子は呼ばなかつた。愛する親友を新年早々ダダ滑りの氷の舞台へ送りこまことに済んだことを、芳乃は大雪に感謝して手を合わせる。朋は食事を奮発してもだれか巻きこみたかつたなあと借家の古い天井を仰いだ。

「優勝賞品はほたるちゃん！」

「かわいそ……」

優勝しなければ人権を失う隠し芸大会。酔っ払いの言葉にそんな効力のあろうはずもないが、いわれたほたる当人の心には、それぞれがそれぞれの態度で寄り添つた。

「参加者！ 私一人！」

「はあ!? なんで!？」

隠し芸をやりたいひとに朋が思わずなつてしまつていたことに、気がつくものはなかつた。

「みなさんにはこれから私がイヤというほど披露させてもらえなかつた隠し芸を見たり途中で逃げ出すことは許しません！」

「見ちゃダメみたいになつてない？」

「修飾節と被修飾節はくつつけるのがわかりやすさの第一歩でしてー」

「うふふ、そうでした。くつついていないとね……歌鈴ちゃんと藍子ちゃんのように」

得意げに眉をそびやかし指をさす茄子だが、スマートフォンの真上の虚空にそれは向いていた。酔いが回っていることを、隣で眉を下げるほたるならずとも実感した。

「こんなところで振つてくるんですか……」

「ひよつとしてもう始まつてます？ 漫談とか」

「インディゴ・ベルですからね。インディゴ……藍色の、が修飾語。ベル、鈴が被修飾語」

「あ、やっぱり始まつてたんですね。黙つて聞いてればたぶん大丈夫ですよ藍子ちゃん」

「漫談つて隠し芸なんですか……？」

「つまり藍子ちゃんが攻めで、歌鈴ちゃんが受け」

「おいコラ」

声を荒げたのは朋である。

「これがやらせてもらえない芸の一つ、艶漫談です。いい訳ですけど久しぶりなのとお酒のせいで、舌がうまく回らなくってすみません」「隠し芸というよりは隠され芸ー」

「つうか隠したまんま忘れる芸」

では次、と茄子が仕切りなおしたときになつてようやく、歌鈴と藍子は言葉の意味を咀嚼し、呑みこんで、茄子よりも顔を赤くした。画面越しに二人の耳の赤いのを見て朋は呆れようとしたが、立ち上がりた茄子がそれを許さなかつた。部屋着の裾をまくり上げ、大筆の代わりに水性ペンを腹に走らせる。マジックでないのが日和つたのか理性なのか、見守るしかない三人にはわからない。だが一つだけわかることがある。

「ほたるーツ！ 止めろーツ！！ 隠され芸が腹踊りで済むわけない！」

次の犠牲者になる前に殴つてでも止めろ!!」

朋は叫ぶが、ほたるはスマートフォンをクレードルから取り上げて茄子の姿が映るように手で構えなおした。

「はーい、ふつうの腹踊りですとお腹に描いた顔をくねらせて面白おかしくするわけですがこの芸では」

「ああーなにするかわかつた！ やめて！ 見たくない！」

朋が頭を抱える間に芳乃も察して顔を逸らした。歌鈴と藍子はスマートフォンに顔を近づけて、頬の産毛の触れ合う感触に息を呑んで姿勢を正した。

「お髭がちよつとリアルです」

「スカートを下げようとするな！ ほたる！ 止めろ！ 茄子を止めろ！ ヤツを止められるのはあんただけなんだ!!」

「と、朋さん、大丈夫ですよ私は……」

「いやほたるちゃんだけの話じやなくてね!?」「見慣れてますし……」

朋がつづけようとした言葉は形にならず、擦り切れた音になつて消えた。

「それに茄子さん、ちゃんとやさしくしてくれますから」

「藍子ちゃん、きょうはほんとうごめんなさい……」

すっかり静かになつたワンルーム。シングルベッドで歌鈴はきょう何度となく口にした言葉を繰り返した。それはたしかに藍子への罪悪感ではあるのだが、茄子とほたるの暴走を見せつけてしまつたことよりも、友情の形が揺らいだことが根底にあつた。ティーセットを片づけるときにどれがどちらの使つたものか悩んでしまつたり、藍子のシャワーの音を気にしてしまつたり、おなじ化粧水を使うことにどぎまぎしてしまつたり。……そしていまも、おなじベッドで、縁から落ちそうなほど距離をとつていたり。

「いいんですよ、歌鈴ちゃん」

いわれるたび、藍子もやさしい声でおなじ返事をする。いいといわれても、しかし、歌鈴としては困るのだ。しつかりしてとか気にしうぎとか、そんな言葉があればもう重ねて謝ることはないのだろう。藍子がそうしないのは謝りかたが悪いせいだとはわかっている。次はちゃんとと思つても、やはり、おなじようなあいまいな言葉になつてしまつっていた。

明かりを消す。アイドルの寮の遮光カーテンは厚く、月光も街灯もすっかり遮つて、歌鈴の部屋に静かな暗闇をもたらす。聴こえるのは暖房の音。そして背中に藍子の息。藍子が部屋に泊まりに来ることは幾度もあり、聞き慣れた静かな呼吸のはずだつた。それがきょうにかぎつて妙に甘く聴こえるのは、きっと茄子たちのせいなのだろう。

藍子の呼吸が浅く、規則的になつていく。眠りの淵から一足先に、深く潜つていつたのだ。歌鈴はえいと心に叫んで寝返りを打つた。いつも泊まりに来たときとおなじように、藍子は歌鈴に顔を向けて眠つている。その背中に布団も毛布もかかつていない。歌鈴が巻き取りすぎたのだ。起こしてしまわないよう注意をはらいながら藍子の背中をあたたかくるむ。二人の間の掛け布団が減つた。ジャスマン、ラベンダー、ローズヒップにトケイソウ。清涼で甘いハーブが

香る。それは藍子の吐いた息であり、歌鈴の吐く息でもあった。

鼻先の触れる距離で香氣を交換しあううち、歌鈴は静かに寝息を立てていた。自動運転の暖房も風を抑えた。静かな暗闇に一つ、自嘲に似た吐息が立つた。

「……もう」

片目を開けた藍子はそうつぶやくと、歌鈴の額に額を押し当てて、眠りの淵に歌鈴を追いかけていった。

(了)